



1972年5月刊
村落研究会局
農事社会務 ◇
白梅学研究会 (11) 短期研究室
大学内研学会

村落研究の国際交流の動き

蓮見音彦

二年間にわたる村研での方法論の討議も一応ビリオドという形になりましたが、日本の村落の解明のためにも国際的な比較といったことが大切な感じがします。昨秋の大会の懇親会の席で、イタリアから帰られた島崎氏が「イタリアの農村には村がなかった」という印象を語られましたが、村のない農村というものが、具体的にはどうじうことなのか私は未だはっきりしない感じで、それがわかると逆に村とは何なのかということがもっとはっきりつかめてくるのではないかといった感じがしています。そういう意味ではヨーロッパなどでの農村研究との交流といふことは、やり方によってはみのりのあるものになるのではないかと思えるわけですが、急けもの私には、ヨーロッパで最近かなりの量の農村研究が出てきていることは知りながらも、それに十分に対応しようということができない

であります。どこかでそれらの仕事を概観してくれないかと思つてゐるのですが、最近このような国際交流をめざしたことろみがいくつかみられますので、一、二御紹介しておきます。

その一つは、村研通信の国際版とでもいふのでしょうか、「農村研究通信」(Peasant Studies Newsletter)というパンフレットが、ピツツバーグ大学の歴史学研究室の D. Sebeok を編集責任者にして、発行されはじめたことです。この編集スタッフは、同大学の歴史学・経済学・社会学・政治学・人類学などの人たちで、今年一月に創刊号が出され、季刊の予定です。資金的な点はどうなつていて、どううと貧乏症の私どもは気になるのですが、希望の方には少くとも一年間無料で送ってくれるということで、今のところ有料になつた段階でお値段がいくらになるのかはわかりません。創刊の辞では、農村社会が激しく変動して今日、国際交流が必要なことが強調されています。歴史学の研究室と国際研究センターとがこの通信を発行したわけですが、多くの学問の交流も粗つてゐるわけで、特に長期間の社会変動の過程について、歴史的にアプローチする方法を発展させることを狙つてゐるようです。この号には、ルーマニアの農村研究の動向紹介、東トルコの親族組織についての論文のほか、書評やヨーロッパ・アメリカでの最近の研究や学会の模様などが紹介されています。

日本の研究の紹介などもとめられており、どなたか論文を寄稿されるとよいと思うのですが……。どこからかの紹介でこのSebeok 氏から私に、購読希望者の紹介と、執筆者の紹介を依頼してきていた

ます。村研でこうした仕事をしていただけたよいと思ひますが、村研でそういうことをきめていただけるまでとりあえず購読御希望の方は仲介しますので私に御一報下さい。日本の研究を紹介して下さる方はおいででないでしょうか。この方も仲介いたします。

二番目に、今夏アメリカで開催される第三回世界農村社会学会議についてですが、この会議には過日の村研運営委員会で、私に出席するよう御指名をいただき、四苦八苦しているところです。もつとも未だどうなるかはっきりしないわけですが。プログラムを送ってもらいましたが、会期は八月二十二日から二十七日まで、ルイジアナ州立大学で開かれます。今回のテーマは、「開発政策と農村生活—その可能性と問題点、対照的な点と共通する点」ということで、いさまでなく国際的な比較検討をこころみようというわけです。この頃アメリカにおられる方があれば出席されはいかがでしょうか。五月の終りまで参加の申込を受付けていたといふことです。前回は喜多野先生や住谷先生などが出席されたとのことですが、今回はどうでしょうか。

国際的な交流といつても、それぞれに関心がちがいますから、ただ集まつただけでは大したことにはならないでしょうし、水まじになってしまふ危険があるわけですが、われわれの研究関心でヨーロッパやアジアの農村をとらえたとき、どのような把握ができるのか、そういう形での交流がなされる方向にもつてゆけるよいと思うのですが、それが可能になるには、やはり素朴な交流をもつと拡大することは、たしかに必要だろうと思つてゐる次第です。もっとも、

これから昨年の大会報告をもとにした年報の原稿をしあげねばならず、夏の国際会議に出るにはそれなりの準備もせねばならず、気ばかりあせつてゐることごろです。

× × × × ×

村落社会研究会年報総目次・(一)

昭和二七年一二月二〇日東京において発企人の会合をもち、翌二八年一〇月二〇日には、仙台の地で第一回大会が開催され以来、我が村落社会研究会は、本年度でちょうど二〇周年を迎えることとなりました。本号では、村落社会研究会年報IとK(時潮社刊)の総目次(各巻の序文は全文)を掲載することにより、今までの歩みを振りかえつてみたいと思います。

◇ 村落社会研究会年報I・「村落研究の成果と課題」

村落社会を共通の研究題目とする同学の士が相倚つて、今度村落社会研究会を結成し、学会の共同討議を年報に編んで成績を世に問

う事にした。その最初に当り日本における村落社会研究の既往の業績を回顧批判して、今後の課題のあるべき点を明かにし、これを年報第一輯として上梓するに至った。これに關し同学の士からの御教示や御批判を賜りたく、今後我々の研究の一層促進するよう御助力を切願する。

一九五四年九月一〇日

一、理論と方法

- 1 社会学——二・三の主要な發展線について 喜多野 清一
- 2 経済学——村落研究の理論と方法 大内 力
- 3 民俗学——民俗学における村落研究の理論 有賀 喜左衛門

二、農山村

村落構造

家族

経済

教育

宗教

人口

政治と行政

法律——農村における法律問題の展望

意識と世論

歴史・古代

——古代村落研究の現況

歴史・中世

歴史・近世

福武直
小山隆
矢木明夫
太田堺
太田堺
中村龍太郎
内山政照
渡辺洋三
甲田和衛
中原吉治
内利美

三、漁村

- 1 社会・経済——漁村研究の動向
- 2 民俗——漁村民俗探求の経過とその将来
- 3 海外の動向——戦後のアメリカ農村社会学概説書
- 4 雑誌

- | | | |
|------------------|-------|------|
| 1 湿美の地の神 | 秋葉 隆 | 塚本哲人 |
| 農村社会学への期待 | 小倉 武一 | 森岡清美 |
| 北海道だより | 鈴木栄太郎 | |
| 農村における母子世帯の生活と意識 | 関清秀 | |
| 北海道の村落私観 | 高倉新一郎 | |
| 家についての覚え書き | 武田良三 | |
| 「社会的階層化」の背景 | 山本登 | |

(なお、各巻末に「後記」が収められているが、第一輯には、村研發足時の事情が詳しく記されているので、ここに全文を掲載することにした——事務局)	竹内利美
	桜田勝徳
	森岡清美

後記

日本における農村社会学の研究は社会学の分野において最も進んでいると言わねながら、同学の学会は極めて微力にしか組織されなかつた。一九三一年小田内通敏、渡辺庸一郎、小出満二、錦織英夫等を中心とする村落社会学会が結成されたのがその初めであり、諸科学分野の専門家の參加していく事に特色があつた。この学会は若

干の出版を行つた中、柳田国男「郷土生活の研究法」（一九三五）・同学会編「村落社会の研究法」（一九三八）の二冊は最も注目すべきものであった。前者は周知の如く民俗学の研究に關する最高の方法論であったが、後者は當時まさに初まりかけた村落の社会学的研究の唯一の指針となつた。その中には鈴木栄太郎「農村社会研究法論」、井森陸平「農村社会学の諸学説と其の批判」、池田善長「日本農村社会学の發展史」、米林富男「社会集団の累積としての村落」、神谷慶治「農村社会と人口問題」、早川孝太郎「農村社会における部落と家」、錦織英夫「農村更生運動と地域計画」の諸篇が含まれていた。このような注目すべき業績を残したにも拘らず、三八年頃を境として学会組織の發展をみないまゝに中絶したのは惜しむべきであったが、これにはいくつかの農村研究が交流していたので、地理学、農業経済学及び農業経済史、民俗学、農村社会学等が再び分れて、夫々その流れを大きくして行つた。社会学について見れば一九三九年に戸田貞三・鈴木栄太郎監輯による「家族と村落」第一輯が刊行されて、農村社会学者の結合はこれを中心として生じたが、学会組織とまでは至らず、一九四三年その第二輯を出した後、同じ年にこれを解消して、東亞社会研究会に発展した。同会においては、戸田貞三・鈴木栄太郎・西岡虎之助・有賀喜左衛門の編輯の下に「東亞社会研究」を刊行した。その第一輯「東亞の村落」を出した後、四四年に第二輯を印刷所で植字中に戦火により失ひ、敗戦と共に中絶した。

村落社会学といふ社会学の一部門に關して同学の学会組織が困難

であったのは主としてそのスタッフの少なかつた事によるものであつて、この事は単に村落の社会学に限らず、社会学における実証研究が戰前には微々たるものであったという事情に裏付けられていた。然るに戦後に至り社会学界においては実証研究が廣汎に勃興して、あたかもその主流とならん許りの情勢を示すに至つた。この事は戰後アメリカ社会学の影響を多分にうけた事にもよると思われるが、その真因はやはり日本内部の事情にあったと見ないわけには行かない。すなわち戰後占領軍によつて敢行された法律や制度の上の重大な変革と共に生活の変化も目立つて來たが、この変革に盛られた民主主義への要請が外的にも内的にも激烈になつて來た事は、敗戦の深刻な経験を通して、日本及び日本人に対する痛烈な認識を要求してきたからに外ならない。村落研究もこういう氣運の一環となつた。だから社会学に限らず、諸科学部門における実証研究の氣運は澎湃として生じたのであって、社会学においてもこれは同様であった。この情勢は社会学内部における村落研究者の結合と協力をとを要望せしめるに至つた。

所でこの実証的研究の氣運は一方において諸科学部門における社会学的研究の氣運をもり上げさせるに至つた。それは諸科学部門の内部に發展して來た諸々のプリンシブルは日本社会との対決において検討を迫られて來た事によると考えられる。したがつて今日程社会学が諸科学部門の内に滲透して行つた時期は日本では見られなかつた。例えば法社会学、経済社会学、宗教社会学、教育社会学、道徳社会学、犯罪社会学等々がそれである。この事は半面社会学内部

の専門分化を促進したので、諸部門の専門家が村落といふ同じフィールドにおける研究の連繋を持つべき必要もいよいよ多くなつて来た。それが村落社会研究会の結成に至る迄の大体の事情である。

一九五二年第二五回日本社会学会大会が東京大学・東京教育大学において開かれた際、參集した村落研究の同学者によつて自然に懇談会が持たれた後、同年一二月二〇日東京において発企人の会合をした。その時は仮称村落研究会の成立を議した。発企人は服部治則、川越淳一、米林富男、武田良三、内藤完爾、中島龍太郎、中野卓、牧野巽、福武直、小山隆、山本登、甲田和衛、秋葉隆、有賀喜左衛門、木原健太郎、喜多野清一、関清秀、鈴木栄太郎であった。

これらはほぼ農村社会学の人々の中から起つた声であつたが、新しく成立すべき学会はそういう枠を超えたものでなければならぬとし、その枠を考えずに共同に研究が出来る事を強く要望したものであつた。そして村落社会研究会といふ名称もその意義をこめたものとして、やがて確定された。次に当時決定した会則を再録しておく。

村落社会研究会則

A 名称 本会を村落社会研究会とする。
B 趣旨 本会は村落社会の研究について専門各分野の連繋を密にし、その研究の発展を期する。

- O 事業
1 研究会
a 每年共同の課題を定め、年一回課題研究に関する共同討論会を開く。

b 毎年の討論大会の際翌年度の課題を決定し、各自で調査研究又は適宜共同調査を行い、次年度の共同討論大会において発表し、論議する。

c 共同討論大会以外に各地において調査し研究会を頻繁に開き、又各地会員の連絡を計り、研究活動をさかんにする。

2 出版
D 会員調査
3 共同調査

本会は機関誌として年報を出版する。これは主として討論会の成果を発表するが、その他に内外の研究業績の発表紹介批判等をものせる。又研究通信も発行して研究の推進に資する。

1 会員は村落社会研究に関心を持ち、共同研究活動を希望する諸科学分野の研究者を以てする。

2 会員はさしあたり入会費百円、通信費百円とする（これは後会費三百円に改正した）。
3 本会に事務局をおく。（当分東京教育大学社会学研究室におく。振替口座一三二八八六番）

本会の運営のために一九五三年度に次の委員を定めた。課題委員（有賀・喜多野・森住・甲田・塚本）、年報委員（野尻・武田・福武）、文献委員（内山・森岡）、通信連絡委員（塚本・北川・松原）、

事務委員（有賀・中野・森岡）である。発足と共に会員の勧誘を試み、会員数は同年八月一〇日現在で一五七名に達し、全国に亘って、専門研究者を含むに至った。一九五三年度の課題は委員によつて、「農地改革の村落社会に及ぼした影響」が提出され、研究通信によつて会員の賛否を計った後確定した。第一回の大会は同年一〇月二〇日仙台の東北大學農学研究所講堂において開催され、会員約七〇名の参会を得て盛大であった。研究発表は井森・大山の司会によつて行なされ、討論は小山の司会によつて行われた。当日の研究発表は次の如くであった。

- 1 岩手県大野郡晴山家を中心として 木下彰（東北大）菅野俊作（東北大）
- 2 岩手県煙山村調査 中村吉治（東北大）島田隆（東北大）
- 3 農地改革後の自作農 森住伍郎（農業総研）
- 4 群馬の一山村の村落構造と農地改革 小池善吉（群馬大）
- 5 農地改革による社会移動について（近畿水田村の一事例） 山本登（大阪市大）西田春彦（和歌山大）
- 6 農地改革と村落構造（未熟地買収の問題を中心として） 高倉又二（宮崎大）

草と村落構造の問題を一層深める目標が掲げられた。そして一九五四年度の大会は一〇月一八日東京教育大学において開催される事に予定されている。一方年報は書肆時潮社の深い好意により刊行の見通しが得たが、種々の都合から刊行は遅れて、第一輯「村落研究の成果と課題」が漸く刊行される運びとなつた。その内容はすでに見られる如き多彩の且つ充実したものとなつたが、紙数の都合から用意された内外の文献目録を第二輯にまわさなければならなくなつた事は読者のために極めて不便である事を深く遺憾とする。また、第一輯のために準備した「農民運動」に関する論考も、都合により次号に収載することとしたが、第二輯は来年四月に上梓される予定であるので、お許しを願いたい。第二輯以下においては毎年の共同課題に關する共同討議の結果が主として採録される事になつてゐる。又研究通信は本年八月迄に十一号を発行した事を附記しておく。

（一九五四年八月一〇日 事務局 有賀記）

◇ 村落社会研究会年報Ⅱ・「農地改革と農民運動」

序

村落社会研究会が発足して三年の歳月を経た。一九五三年以来毎年一回の大会において共同課題による討議を行つて来たが、一九五三年には「農地改革の村落社会に及ぼした影響」、一九五四年には「農地改革と農民運動」の題の下に兩年度の業績の半を收め、年報第一集として世に問うことにした。村落社会の研究の道は遠く、そ

は一国の大好きな政治・社会構造と関連する問題であるから、我々はその一部にふれたにすぎないし、それは又関連諸科学や諸学会との協同によって達成するより外はない。そういう意図の下に我々の研究の成長をねがい、同学の士からの御助力を切望する。

◇ 村落社会研究会年報Ⅲ・「村落共同体の構造分析」

村落社会研究会は発足以来四年をすぎて、その成長の経過を振りかえってみれば、毎年の共同課題の討議による大会と年報の発刊とを地味につづけてきた。今年の年報が村落共同体の構造分析に目標をおいたことも自然の成行であった。最近村落共同体の議論は極めて盛んであり、その取り上げ方も雑多であるから、今後当分その帰趨もさだまらないであろう。この年報の執筆者がその立場を同じうするわけではないが、それは自由なる討議の中に共通の知識を大きくすることに本会の結成の基盤があるからであり、この問題の解決に向つて寄与することを信ずるものである。

、部落構造と農民運動 る農民運動の推移 —	、部落の平和と階級的緊張 — 一行政村における 「共産村」における農地改革と農民運動 名子制度と農地改革	、農民運動に関する主要な文献と資料 農民組合の系譜図について 動向（一九五四年七月—一九五五年六月）	、給与者同盟会の成立とその条件	、村落史の研究	、経済学における村落研究 法律学における村落研究 社会学における村落研究	、社会経済的地位尺度 (Socio-Economic Status Scale) について	福武 大内	松原治郎	生田清彰
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
西田春彦	内藤莞爾	渡辺洋三	中村吉治	小池基之	松原治郎	内山政照	神谷和夫	木下藤和	本後藤和

シニテイ論の展開

一 現代日本における村落共同体の存在形態 榎 武 直
二、村落共同体と家 有賀 喜左衛門
三、村落共同体——東北地方近世村落の実態から——中 村 吉 治
四、半封建的共同体の形成契機と耕地強制——福 星 塚 慶
島県における一開拓農村の実態を中心として——
五、漁業と村落——三陸カツオ漁村の事例——竹 内 利 美
六、村落共同体に関する覚え書 喜多野 清一

2 フランスにおける村落共同体研究の動向 野口 隆
3 ロシヤに於ける村落共同体の研究 —ミー 小林哲郎

ルをめぐる論争について —

4 ゲルマン的共同体の家族構造 —サン・ヂ 住谷一彦
エルマン・デ・ブレ修道院所領明細帳の社

会学的考察 —

八、研究動向

1 社会学
2 経済学
3 法律学
4 歴史学
5 地理学

川越淳二
木下彰
潮見俊隆
永原慶二
佐藤甚二郎

村落社会研究会は一九五五年、一九五六六年に亘って共同課題として「農家人口の変動と家族の構造」をえらび、農村における過剰人口の存在形態の分析を行つたことは、この要請に答えようとしたものである。今その成果の一部を年報第四集として世に贈る。

一九五七年七月一八日

一、農村過剰人口形成の現状と類型

西村甲一
小池基之

二、農村過剰人口の存在形態

中島龍太郎
宏

三、農家人口の配置規制

並木正吉

四、戦後に於ける農家の人口移動 —補充問題を

渡辺久雄

中心として —

五、兼業農家の家族構造 —北九州近郊農村の事

原

六、研究動向 (一九五六年四月 / 一九五七年三月)

例研究から —

◇ 村落社会研究会年報IV・「農村過剰人口の存在形態」

序

日本が持つたやみは種々あるが、人口問題ほどそのなやみを集中的に示すものはない。それは村落や農・漁業ばかりが、その重圧にあえいでいるのではなく、都市や商・工業もまた共通の苦惱に耐えかねている。どうしてこの重圧を押しのけるかということが日本の

当面している最も重要な問題の一つである。そして海外移民がその解決策であるとするようなあまい考え方は今日はすでに見られないだけに、この問題の分析は學問的に極めて重要となつてゐる。我が

◇ 村落社会研究会年報V・「戦後農村の変貌」

序

敗戦と敗戦革命とを経験した日本の戦後の歩みから何が生れたの

であろうか。なかでも農村は最も大きな変化を農地改革と家族制度の廢止によって受けている。我々は農村における戦後の変化を検討することによって、日本の進歩の新しい軌道を創る仕事に寄与したい。

一九五八年九月

一、東京近郊村の家族

小山 隆
竹内 利美

二、東北農村の家族——水田単作農村の場合——

菅野 優作
安孫子 麟

三、東北農村の変貌

後藤 和夫
常盤 政治

四、愛知の村落

川越 淳二
中野 阜

七、北陸の定置網漁村——その漁業改革前後——

小倉 武一
佐々木 潤之助

八、戦後ににおける農政の動き

矢嶋 仁吉
中島 龍太郎

九、動向(一九五七年四月)——(一九五八年三月)

大島 太郎
暉峻 衆三

1 地理学

2 地理学

3 社会学

4 経済学

5 法律学

序

農村はいま大きな転換期にさしかかっていることとしきりに報じられている。一方で、大規模な米作地帯・果樹作地帯での農業の前進が指摘されるとともに、他方で、圧倒的な兼業化的進行が農業の赤信号をかけている。それは、農地改革後の農業が、戦後の資本主義発展のなかでとつて対応の姿が漸く顕著なものとなってきたことを示すものに外ならない。このような農業の動向を前にして、再び基礎的な村落共同体のあり方をかえりみることは、共同体論が少くとも表面的には下火にあつたこととは別に、問題の整理新しい問題の発見にとって重要な意義をもつものと考える。村落社会研究会の年報第六輯がこのような意義をもちうることを期待して世に贈る。

一九五九年八月五日

一、農業村落共同体の構造と性格

余田 博通
蓮見 音彦

二、村落共同体と農村社会学

布施 鉄治
鈴木 宏

三、戦後ににおけるムラの形成過程と村落共同体

島崎 彰
島崎 彰

四、共同体の基礎概念

島崎 彰
島崎 彰

五、村落共同体論の系譜と文献解題——農業經濟學と農村社会学との結節点としての——

福武 直
福武 直

六、村落共同体をめぐる討議——村落社会研究会
第七回大会総括討論——

七、動向(一九五八年四月)——(一九五九年三月)

1 法律学

加藤 永一
加藤 永一

<p>◇ 村落社会研究会年報Ⅱ・「政治体制と村落」</p> <p>序</p> <p>日本国民の生活にとって政治が今日ほど痛切に感じられる時期はない。もちろん国民生活にとって政治が今日急に重要なようになったのではないが、國民が主権者であるという自觉がもり上つて来たことに今日の意義がある。</p> <p>最近生じた政治的混乱を単に敗戦後の現象と見することはできない。敗戦そのものすらそうであったが、これらの混乱と國民のうけた深い苦悩とは日本の歴史の中に深い根のあることを我々は知らねばならぬ。この分析の中から國民が眞に主権者として成長し、福祉国家の明るい政治を創造しようとする意欲を高めることが大切である。</p> <p>本会は年報第七輯として、「政治体制と村落」をくり、近世から現代に至る日本の政治体制下における農村の変化を明らかにしようとしたのも、志はここにある。</p> <p>一九六〇年八月</p> <p>一、政治と村落 — 近世 —</p> <p>中 村 吉 治</p>	<p>上 原 信 博 田 原 音 和 小 野 正 雄 岩 田 慶 治 村 武 精 一</p> <p>二、明治前期の政治体制と村落 三、明治後期における「村落と政治体制」 四、小作争議期における村落体制 五、戦後における政治と村落</p> <p>六、日本農政の歴史的展開 七、村落と國家法</p> <p>八、動向（一九五九年四月—一九六〇年三月）</p> <p>1 法律学 2 経済学 3 社会学 4 歴史学 5 地理学 6 民族学</p> <p>江 守 五 夫 常 盤 政 治 島 田 治 郎 河 村 望 郎 蓮 見 音 郎 松 原 力 三 大 内 德 一 渡 辺 洋 矢 木 明 夫 谷 田 伊 德 神 島 伊 德 矢 木 田 伊 德 谷 田 伊 德 島 田 伊 德 原 力 三</p>
---	--

戦後の農政を貢献してきた自作農主義と、それによる食糧増産政策とからの、農政の転換は從来からも徐々に進められてきていたが、それが、農業の基本問題の検討を通じて明確に、構造政策を要とする農業基本法として制定をみた。

それを促したものは、異常な成長経済とそのもとでの農民層分解の進展とであったが、それは、全面的な農家経済の崩壊という形で、農業危機を醸成し、農民の新たな対応を迫っている。

このような過程にあって、本研究会の年報第八集「農政の方向と村落社会」を世に問う。現在の農業——農村問題を考える一助ともなれば幸いである。

一九六一年八月

- 一、いわゆる「高度成長」と農業構造
- 二、林業の基本問題と村落構造
- 三、東北村落における地主制と政治体制
- 四、農民層分解と農村の支配構造
- 五、漁村における共同組織と「家」の問題
- 六、「政治体制と村落」に関する討議——村落社会研究会第八回大会総括討論——

七、動向（一九六〇年四月）—（一九六一年三月）

- 1 法律学・政治学
- 2 地方行財政
- 3 経済学
- 4 歴史学
- 5 民族学
- 6 社会学

小林 基之	佐伯 尚美	田原 音和	安原 茂	玉城 肇	余田 博通
佐藤 三衛	久留島 陽三	竺盛昭	安良城 一彦	山谷 一彦	務局

◇ 村落社会研究会年報Ⅹ・「農民層分解と農民組織」「

序

村落社会研究会は一九五三年に設立され、昨年創立十周年を迎え、創立の第一回大会を開いた仙台において、第十周年記念大会を開いた。この大会における共同課題として「農民組織」を掲げた。

戦後一八年を経て日本はわれわれの予想を超えた発展をとげつた。初めに民主化の目標にまっしぐらに突進した。この基盤の上で今や工業化にばく進している。この条件の中で、農村は急激な変化に当面しなければならなかつた。農村の広汎な都市化の中で、農民はどうのように家を改編し、村落を再編し、農業を日本の、さらに世界の産業構造の中にいかに位置づけるかといふ果しもない問題展開の中で苦悶し、また嘗々と努力している。農民組織とはこのような苦悶と努力の指標でないものはない。ここに共同討議の成果を贈る。

一九六三年九月

- 一、農民組織の存在形態
- 二、農民の組織としての農業協同組合——農村社会構造再編成の視点から——
- 三、漁協連合の協同経営と漁民組織
- 四、津軽りんご地帯の共同化と農民組織
- 五、水稻单作農業の動向と農民層の分解
- 六、「農民組織の存在形態」をめぐる討議——村落社会研究会第十回大会総括討論——

七、村落研究十年の歩み

- 1 法律・政治学
2 歴史・経済史
3 経済学
4 社会学

神谷 力
矢木明夫
島田隆治
常盤政和
後藤和夫

「農業経済学」
「社会学」
「民俗学」
(各二〇~二五枚)
○ ○ ○ ○

戒野真夫
吉沢四郎
桜田勝徳・島越皓之

(3) 編集後記 編集委員会

村落社会研究第八集の編集について

研究通信七九号で、年報第八集の編集の概要をお知らせしましたが、応募原稿および委員会からの依頼原稿を含めて、寄稿を予定している原稿はつきのようあります。これらの原稿が集まり次第編集委員会を開き内容検討を行ない、掲載原稿を決定して最終的な編集を終え、出版社の方へ回したいと思います。

(1) 寄稿予定の論文執筆者

- 田原音和・菅野正・細谷昂 (約二五〇枚)
○ 塩野芳夫 (約八〇枚)
○ 白井宏明 (約八〇枚)
○ 中野卓・川本彰・蓮見音彦 (各約五〇枚)
○ 安原茂 (共同討論の要約) (約五〇枚)

(2) 研究動向の執筆者

- 「史学・経済史学」 岡 光夫

◎ 新入会員

与那国選 琉球大学 (自宅) 那覇市首里金城町四一一大

△事務局短信

通信八〇号をお届けします。学年末・始の忙しさにまぎれて、すこかり遅くなりました。とくに、蓮見会員から原稿を四月中旬にいただきましたのに、発行が遅れたことをおわびします。